論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	甲 ㊙ 第　　号	論文提出者名	阿知波基信
論文審査委員氏名	主査　栗田　賢一 副査　長尾　徹 野本　周嗣		
論文題名	下顎埋伏智歯抜歯後症状に関する研究 ー局所麻酔下片側抜歯と鎮静下両側抜歯との比較ー		

インターネットの利用による公表用

（論文審査の要旨）

No. 1　　（2000字以内のこと）　　愛知学院大学

下顎埋伏智歯（第三大臼歯）の抜歯手術は、現在口腔外科専門手術の中でも最も頻回に行われている手術である。本邦では、この手術は片側ずつ外来にて局所麻酔下で行われるのが一般的であるが、静脈内鎮静法の併用を、困難な手術や両側同時手術など、長時間手術に適応することがある。過去の研究から、入院下での両側埋伏智歯抜歯は、患者の満足度が高いとの結果が示されているが、一般的には片側手術より、両側手術の方が術後疼痛は大きいと考えられる。そのため、術後の疼痛が増大するとの意見より、鎮静下での両側同時抜歯を行なわないと決め患者への説明も行わない施設も多い。一方、論文著者らは、これまでに鎮静下で抜歯を行った場合、両側２歯を同時に抜歯しても、術後疼痛が著しく増大せず、術後の鎮痛剤の使用が少ない場合を経験してきていた。しかし、片側を局所麻酔下（以下、局麻片側抜歯）で行う場合と両側を静脈内鎮静法併用局所麻酔下（以下、鎮静両側抜歯）で行う場合どちらが、術後の疼痛管理において有利かを検討した報告はない。そのため、下顎埋伏智歯の鎮静下での両側同時抜歯の術後疼痛が、片側のみの抜歯と比較しても、臨床的に大きくならないことを明らかになれば、鎮静下での両側同時抜歯が推奨されることになる。以上より、下顎埋伏智歯を両側に有するものが、鎮静下で両側同時抜歯をした場合の術後疼痛が、局所麻酔で片側のみ抜歯する場合と比較して、臨床的に劣ってないことを調査することとなった。

2012年から２年間に、蒲郡市民病院歯科口腔外科で下顎智歯抜歯を行う

患者の中で、基準を満たし本研究の趣旨と内容に同意を得られたものを対象に行なった。局麻片側抜歯群および鎮静両側抜歯群のすべての症例において、一人の術者が統一した一般的な顎骨削合を伴う埋伏歯抜歯手技を用いて手術を行った。痛みの評価スケールとして Full Cup Test（FCT）を用いた。術後疼痛の評価は、術後１日目の疼痛の程度（FCT）をプライマリーアウトカムとし、術後２日目と７日目の疼痛の程度（FCT)。および、術当日から７日目までの鎮痛剤の使用回数をセカンダリーアウトカムとした。さらに、両群における術中の合併症、術後における有害事象なども併せて調査した。

FCT における術後１日目の最大疼痛、平均疼痛のどちらも鎮静両側抜歯群の方が、統計学的有意差をもって軽度であり、術後２日目の最大疼痛、平均疼痛、術後７日目の最大疼痛、平均疼痛は、いずれも両群に統計的な有意差は認められなかったことを明らかにしている。鎮痛剤の服用回数について、術後１日目、術後２日目ともに鎮静両側抜歯群の方が統計学的有意差をもって少なく、術後３日目から７日目においては、両群に著明な差は認められなかったことを明らかにした。術中の合併症、術後における有害事象については、本研究では両群ともに存在せず、有意差は認めなかったことを明らかにした。本研究の目的は、下顎埋伏智歯の鎮静下での両側同時抜歯の術後疼痛が、片側のみの抜歯と比較しても、臨床的に大きくならないことを明らかにすることであった。よって、今回の研究結果により、

（論文審査の要旨）

No. 3　　（2000字以内のこと）　　愛知学院大学

鎮静法下での両側智歯同時抜歯は、下顎智歯臼歯の抜歯方法の選択肢の一つとして、患者に提供すべきであるものと確認された。

本研究は、下顎埋伏智歯抜歯術を行う際に、臨床研究情報を提供するものであり、口腔外科学の臨床に寄与するところが大きい。よって本論文は博士（歯学）の学位授与に値するものと判断した。